



# 内戦後新世代のふたり、セイハ17歳、メサ18歳 アンコールワットの街から来るクライマー



キム・メサ  
さん



セイハ同様、シエムリアップ生まれ、ダップマカラ高校に在学。グレード12（日本の高校3年に相当）。2011年6月のミニコンペで2位、翌2012年1月の第1回アンコールカップで、5.11dの超決勝でセイハに敗れ、2位、2012年12月の第2回アンコールカップでは、5.12bの超決勝で4位。農家である家業とともにすでにアンコールクライマーズネットのインストラクターも勤める。人工壁よりも外岩でのセンスが際立ち、また初心者への講習も丁寧で、その分野での適性を窺がわせる。4歳で父親と死別。すでに一家の大黒柱である。

ソー・セイハ  
さん



アンコールワットの街シエムリアップ生まれ。公立高校、ダップマカラに在学。グレード11（日本の高校2年に相当）。クライミングを始めて僅か4ヶ月の2011年6月のミニコンペで5.11bをオンサイトして優勝、翌2012年1月の第1回アンコールカップで、5.11dの超決勝をオンサイトして優勝、2012年12月の第2回アンコールカップでも、5.12bの超決勝を制して優勝した。陽気な両親、弟とトンレサップに近いタフな荒地に住んでいる。穏やかで指導力もあり、カンボジアのクライミング初世代のリーダーとして期待される。

2013年1月に、僕が代表を務めるNGO・アンコール・クライマーズ・ネット（ACN）を通じて、カンボジア・クライミング連盟（CCF）から日本山岳協会（JMA）へ、始まったばかりのカンボジアのクライミングを正しく普及するための支援要請があった。

そして2月、JMAの神崎会長が自ら、シエムリアップにある僕らの人工壁、アンコール・クライミング・ウォールを訪れた。その翌日、神崎会長は、まるで居酒屋にでも誘うような調子で、ユース2人とコーチ1人を日本のクライミングコンペに招待したいがどうかと言った。

こうして、JMAは公式にCCFの要請にこたえ、8月の「第16回JOCジュニア・オリンピック・カップ大会」への招聘、参加をクライマックスとしたカンボジア人・ユース・クライマーの研修計画を提案、カンボジアの高校生クライマー2人と引率教師（監督）1人の派遣受入れが実現する運びとなった。

神崎会長からフランクなオッファー

を受けたそのとき、僕はすぐに抜きん出た資質のセイハを思い浮かべた。

そして、2010年からカンボジアに3度来て、子供たちの指導を続けている信州・佐久のクライマー、浅井和英君も。彼は昨年12月の第2回アンコールカップのルートセッターも務めた。彼の指導と日本の恵まれた環境でセイハがどこまで伸びるか見てみたいといった気持ちだが、僕のなかで一気に膨らんだ。そして、有能なフォロアーとしての資質を垣間見せるメサを、セイハのパートナーとして日本へ送り出すことにした。

カンボジアは70年代から80年代にかけて長く戦火の中にあった。70年代後半の虐殺政権時代には、高僧や教師などの知識人を中心に国民の5分の1以上を失い、お経や書物のほとんどが焼かれた。人々は都市や農村を追われ、強制労働を強いられた。虐殺政権が崩壊した後も内戦は続き、地区によっては四半世紀に渡る苦難の時代を経て、1993年の総選挙で、平和と復興へのスタートを切ったのだ。

セイハとメサ、2人は内戦後復興のスタートとはほぼ同時に生まれた平和を担う象徴的な新世代だ。2013年現在、復興は目に見えて進んでいるけれど、国民がスポーツを楽しむといった環境はまだ用意されていない。それでも子供たちはスポーツに意欲的だ。ことに冒険的な要素のあるスポーツクライミングはこの国の子供たちの健全な育成に大きく寄与すると期待される。

2010年2月に小規模で屋外タイプの人工壁を僕らがシエムリアップに作って僅か3年、強力なクライマーを育てる環境からはかけ離れている点や、過酷な自然条件を考えると、彼らの成長振りには目を眩るものがある。無論、まだまだ日本のレベルに通用するとは思えない。しかし、今回与えられた幸運が、忌まわしい戦争の記憶からカンボジア人が誇りを取り戻す一助となり、彼らをさらに高みへ運ぶきっかけとなることを願って止まない。

（NGO・アンコール・クライマーズ・ネット（ACN）代表理事／伊藤忠男）